

—— 学術大会報告 ——

## 第15回聖路加看護学会学術大会を終えて

佐藤 エキ子<sup>1)</sup>

### I. はじめに

私が本学術大会の大会長を仰せつかった時、まず頭に思い描いたのが「看護技術」であった。私自身、現在も病院という臨床の場に身をおき、間接的ではあるが看護実践と向き合っている。また、私は看護のなかで中心となるのは看護実践であると考えており、質の高い看護実践（看護サービスの提供）は看護師の「看護技術力」によるところが大きいと考えている。

看護の実践知を示した教本でもあるナイチンゲールの『看護覚え書』で、ナイチンゲールは看護技術を“nursing art”と表し、看護の実践で求められるのは、単なる看護行為だけではなく、観察技術、科学性、創造性などさまざまな要素を含めた看護技術サービスの提供であると記している。

第15回学術大会は、病院で働いている私どもと聖路加看護大学の教員の方々との協働のもと、メインテーマを「開こう『看護の技術箱』～臨床看護実践への貢献～」とし、開催することができた。

### II. 看護技術について

「技術」ということばを辞書で引くと、①物事をたくみに行うわざ、②テクニック・科学を応用して自然の物事を改変・加工し、人間生活に役立てるわざ、と記されている。また「技術的」とは、科学の応用面に関係のあるさまであり、「技術論」とは、技術の本質やあり方に関する理論的考察と記されている（広辞苑、2008）。

看護技術は、まさにたくみに行う技（アート）と科学（サイエンス）と、経験に裏づけされた知とが統合されたものであると言える（図）。

本学術大会が、参加者にとって看護技術の本質やあり方等について考察できるチャンスになっていたら幸いである。

### III. 学術大会プログラムについて

本学術大会のメインテーマにもとづいて、プログラムの扉が開けられた。

プログラムは、対談、教育講演2つ、特別講演2つ、

および一般演題の発表（示説による）を中心に構成した。また、学術大会の新企画として、「看護技術展示」のセッションも設けることにした。

最初に、大会のメインテーマ「開こう『看護の技術箱』」に沿ったオープニングセッションとして、川島みどり先生と菱沼典子先生の対談が行われた。「技術箱」はまさに看護の道具箱であり、その道具を看護師がいかに使いこなし、成長させていくかについて考えることができた。

教育講演1では、新しい看護技術の概念（キネステティック）とそのテクニックについて学んだ。また、人の動きの支援には、①ウォームアップ、②機能トレーニング、③クールダウンの3段階があることも知り得た。教育講演2では、エビデンスに基づいた高度看護実践と褥瘡研究の例からトランスレーショナルリサーチについて、その知識と研究の必要性を学ぶことができた。

これら対談、教育講演については、本稿の後に詳しく紹介されているので、ぜひ一読いただきたい。

特別講演1では、衆議院議員の阿部俊子先生をお招きした。阿部先生の講演から、保健・医療政策への働きかけとして、①EBNに基づいた看護技術を社会に示していくこと、②看護技術のもたらす経済効果もアピールしていくこと、③さらには社会が必要としている「看護技術」を積極的に社会に伝えていくこと、が看護職者の使命であることを学ぶことができた。

一般発表は示説とし、看護実践に基づく研究を中心に24演題の発表がなされた。発表会場では、大勢の参加者との意見交換が活発に行われていた。

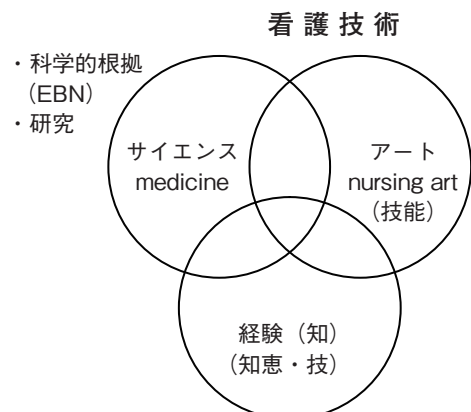


図 看護技術の構成要素

1) 聖路加国際病院、第15回学術大会長

また、昼休みの時間帯には、初めての取り組みである「看護技術展示」を行った。このセッションでは、臨床看護実践から生まれたアイデアをもとに作成した看護用品（ex. 患者の手術・検査用のガウンの考案）をはじめ、専門領域の生の看護技術の紹介（ex. 産後の母親への10分手順マッサージの導入）などが行われ、熱気にあふれていた。

以上、学術大会当日の模様を紹介してきた。参加者は、各講師による講演や一般演題発表を通して、多くの知見や学び、気づきを得ることができたのではないかと期待している。

最後に、学術大会が無事に開催できたことは、学会員の皆様をはじめ多くの関係者の皆様にご協力をいただいた結果、と厚く感謝申し上げます。